

Book Fan Newsletter

発行：平成24年12月15日
編集：塩尻市立図書館
0263-53-3365
(Book Fan Newsletter 6号)

『市民がつくった電力会社』

田口理穂（著） 大月書店（出版）

チェルノブイリの危機が、大人たちを脱原発運動に動かし、小さな街の自然エネルギー電力会社設立に発展。電力の地域独占を変え、ドイツ全体に影響を与えた市民の活動内容も紹介されています。日本でも再生可能エネルギーの固定価格制度がようやく施行。家庭での取り組みも含め、とても参考になる一冊です。

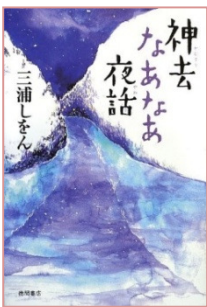
神田堂書店 大塚さん



『サエズリ図書館のワルツさん』 紅玉いづき（著） 講談社（出版）

あなたは本に何を見出しますか？ これは第三次世界大戦によって本が希少なものとなってしまった世界で、本を貸し続ける女性と彼女を取り巻く人たちの話。本に絆と思い出を見つける人もいれば、憎しみを見つける人も。それでも本を操る手を捨てることはできないという性に、作者の本を大切に思う気持ちが伝わってきます。

興文堂 iCITY店 弾塚さん



『神去なあなあ夜話』 三浦しをん（著） 徳間書店（出版）

お仕事小説の旗手が贈る〈林業エンタテインメント小説〉で、「神去なあなあ日常」の続編となっています。

「のんびり行こう、ゆっくり行こう」 そんな「なあなあ」の精神で長年山と共に生きる神去村は、三重の山奥にあって、横浜生まれ横浜育ちの平野勇気が林業に携わります。

取り巻く村人たちが心地の良い個性を発揮して、山で生きる魅力が生き生きと描かれています。

興文堂 平田店 奈良井さん

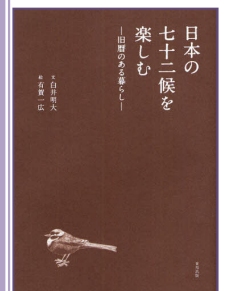
『日本の七十二候を楽しむ ー旧暦のある暮らしー』

白井明大（文） 有賀一広（絵） 東邦出版（出版）

日本には二十四の節気と七十二もの季節があることを知っていますか？

木の芽起こし、初がつお、土用のうなぎ、秋の七草、ふろふき大根…。旬の野菜や果物、魚、野鳥、草花、折々の風や雲の名前。巡りくる季節や自然を楽しむ、暮らしの歳時記。旧暦は心と体で感じる日々の楽しみに満ちています。イラストは、伊那生まれの有賀一広氏。

中島書店 中島さん



『内田悟のやさしい塾 秋冬』 内田悟（著） メディアファクトリー（出版）

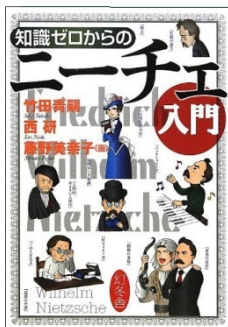
じゃがいもは沸騰させない温度でゆっくりゆでるとホクホク。キャベツは葉脈と葉脈の間を切るとあまい。扱い方ひとつで野菜の味が劇的に変わる！

青果店主ならではの旬野菜のはかりしれないパワーと魅力を伝える、春夏版に続く第2弾。今回は、キャベツ、白菜、にんじんなど秋冬に旬をむかえる野菜をよりおいしく食べるコツが写真付きでこまかく解説されています。目ききどころや保存法なども掲載されており、読みごたえのある一冊となっています。

丸文書店 金子さん



図書館職員が選んだ 今月のおすすめ本



知識ゼロからのニーチェ入門
武田青嗣ほか（著）
幻冬舎（出版）

哲学書というと難しそうだと構えてしまいがちですが、こちらの本はマンガも交えて、気軽にニーチェの人生を知ることができます。哲学

の論述を読むことに抵抗を感じる人でも、哲学者の人柄を知れば、もっと楽に読み解けるかもしれません。「知識ゼロからの」ではじまる入門書はシリーズで出版されています。あわせてどうぞ。 哲学分野担当

イギリスの小学生 ヨーロッパの小学生 1
多田孝志（監修） 学研教養出版（出版）
今年、ロンドンオリンピックが開催されたイギリス。歴史・文化・食べ物・暮らしが、小学生の生活とともに紹介されています。



多様な側面からイギリスを知り、日本との違いを楽しめます。フィンランド、フランスなど全6カ国のシリーズになっています。

児童社会科学担当

「心の時代」にモノを売る方法
小阪裕司（著） 角川書店（出版）

「ワクワクするビジネス」などをキーワードに、新たなビジネススタイルを提案している著者による新刊。「売れない」三重の問題、新しいビジネス6つの成立要件、磨くべき4つの感性など具体的な改善例に基づき、ビジネスチャンス色々と示唆しています。「仕事にどう生かそう？」と、喚起される1冊。



産業分野担当

<銀の匙>の国語授業

橋本武（著）
岩波書店（出版）

「伝説の教師」と言われた先生は『国語』とどのように向き合ってきたのか。国語は楽しく能動的な学びだ、と改めて感じる事ができる1冊。国語に苦手意識がある方でも、気軽に読めるのではないのでしょうか。今年100歳になる著者が、学校の授業のように語りかけてくれます。



若葉のコーナー担当



僕が旅に出る理由

いろは出版
世の中がなんだかつまらないと思っている人でも、あと一步を踏み出せば、世界がまったく違って見えるかもしれません。旅に出る理由は十人十色。でも世界を見て、様々なことを経験した100人の大学生に共通しているのは、今までの自分がいかにちっぽけであったか、ということではないでしょうか。本の帯のことば、「退屈なのは、世界か、自分か。」にハッとしました方、ぜひ一読を。若葉のコーナー担当

『図書館はラビリンス
～だから図書館めぐりはやめられない2～』
内野安彦（著） 樹村房（出版）

前塩尻市立図書館長が図書館への熱い思いを綴った書籍の第2弾。著者自身の青春時代の思い出や、本の話などから図書館の世界へ誘われます。気軽にエッセイとして楽しみながら、図書館の舞台裏などを知ることができる類書がない1冊です。

図書館のあるべき姿の提言に職員としては襟を正される1冊でもあります。 総記分野担当

